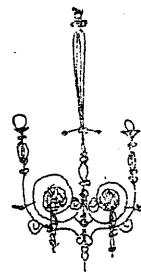


保育の対象は

児童一人々々にある

倉橋惣三



保育の対象は児童一人々々にある。すべての児童（前々号所載）といふも、すべては児童一人々々に他ならない。日々直接に（前号所載）といふも、児童一人々々に対しこそである。一人々々に対する眞実な関心なくして保育のこころの眞実はない。

一人々々といふは、個々の個性に即するということでもあ

る。それがなければ、保育の方法を誤る。又、一人々々を貴ぶといふは、基本人権の眞の尊重でもある。それなければ、人権の所在に眞に忠なりといえない。しかし、こゝでいうのは、心理的に方法の正しさを得るために、人権的に個の確立のためとだけのことではない。寧ろ、もつと実体的に個体的に、日々の実際保育の対象としてある。その意味において、一組三十人の保育は、一人々々の保育を三十しているのである。一分団五人の保育も、一人々々の保育が五つ行われてゐるのである。保育が集団を対象とするということも、一

人々の保育のための方法的対象として集団生活を必要としていることで、集団が保育関心の究極対象ではない。一人々々を離れて人間愛の眞実はなく、人間愛の結合なくして、保育の眞実はない。愛ほど一人々々に切実でなければならぬものはない。一人々々の切実に総和はあつても、一人々々への切実は決して、総和の部分ではない。

幼児達は集団の中におかれて社会的生活を営む。その社会的生活の中に、一人々々を活かしてゆく。社会的でなくして生活的であり得ない。従つて本質的に生活保育のためには、形態的に社会的保育でなければならない。その意味で社会的ならずして、各々の一人々々は眞に活かされない。一人々々が眞に活を得ないところに、保育が行われ得ることはない。故に、保育の実際は常に社会的に行われる所以である。一人々々を保育するということは、一人々々が孤独におくことでは決してない。たゞ、一人々々を社会の中に埋没しないことで

ある。社会の中に一人をも見失わないことである。眞の保育者は一匹の迷える羊の子をも見逃がさない。常に一人々々後を追い一人をも見忘れず、一人々々を不斷に我が心の間近かに見守る。方法的に個性保育である前に、又、観念的に個人保育である前に、めい／＼をめい／＼として愛し、めい／＼をめい／＼として憂うることこそ保育の眞のこゝろである。

眞に花を愛する人は、交り咲く花壇の中に、特に色美しく特に香り高い花を愛する人ではない。目立つものに目をつけるのは、どんな心ない者にもあり得ることである。少くも、その人を心ある人とはいえない。花に対して然り、況んや子供に対するにおいておや。しかも、教育には、心なきといいう上に、そらなり易い傾向がある。本来において結果を求めることでもある教育において、よきものに目のつくは自然である。健康児・優秀児が教育者の目につくのは自然である。或はまた、わが教育を遂げ易からしめると思われる柔順児の好ましいのも自然である。更に、幼稚園などにおいて、美容の子が教師に好ましいのも、一つの自然もある。しかし、教育は、結果の楽しみばかりではないし、まして、教師の好みばかりでもない。自然といつて、たゞ容易な自然ばかりでもない。時に、難きに打克つ努力の興味でもあり、時には、難きに挑む熱意もある。殊に、結果の難さを思わせる子供たちの現状は、同情と憐憫とを惹くものが多い。——そこに、大輪美形の花の外に、小さく、みすぼらしくさえある、

可憐の花が教育の眞の関心を促すのである。教育の心につつて。

これを保育の極く實際においていえば、そういう子らこそ、一人一人として保育しようとするものにとつての、見失えない対象である。一人々々という以上、関心は各の子らに平均でなければならぬ。しかし、保育者的心のもち方としては、そうした、見失われ易い子、極言すれば、好ましくないようの氣もする子らに、注意と愛情のより多い傾倒が行われる時こそ、一人を見逃さない實際になり得るのである。若しそれ、すべてが、自分の好きな、教育しやすい、教育に手のかからない子らの一人々々だけならば、一人々々といふことに、何んの自然以外の意味があろう。況して、そういう一人々々を、保育の第一の対象とすべきである。

『憎くまれ子世に憚る』といふ、昔のいろはガルダの言ひ草の様のことが、幼稚園の中にあるう筈はない。『色の白いは七難かくす。』なんて花柳界でもいわれそうな評価が、幼稚園の中にあるう筈もない。強情な子でも、色の黒い子でも、一人々々として、大切な教育の対象であることは素より、先生の目には、手には、一層愛を注いでやりたくなる子である。一人々々とは、一人をも見失わないことであると共に、保育の対象として予め評価しないことである。